《環》
量による人体把握の追求
―着衣と裸婦による制作を通して―

《Kan》

A Study to Grasp the Woman's Body in Volume

－ Through Making Nude and Clothed Woman Sculptures －

1721M04
山下　智愛
Chie YAMASHITA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻　平成30年度修了生
Division of Fine Art, Graduate Schohol of Art, Sojo University

稿者は、学部時代の経験から、修士課程では量（ヴォリューム）を意識し、モデルの量を増減させて制作を行うようになり、過去の作品の反省を活かしながら、新しい作品を作る中で、さらに量による人体表現を追求したいと思い、修了研究のテーマにすることにした。

第１章１節では、学部の卒業制作で得た量の多少による相違を人体表現上により鮮明に視覚化したいと思い、布を使って量感を強調した着衣像と、人体の持つありのままの量、すなわち裸体の人体像とを対比させて量感表現を追求することにし、研究テーマを「量による人体把握の追求―着衣と裸婦による制作を通して―」としたことについて述べた。次いで２節では、量による人体制作を行うには、モデルである裸婦自身が持つ量と、彼女に布をまとわせてさらにふくらませた量を比較できるようにするのが良いと思い、着衣像と裸婦像の２点を同時に制作することにしたことについて述べた。続く３節では、２体とも同じポーズで作り、量の多少による見え方の違いや雰囲気の違いを追求するに当たって、着衣像と裸婦像それぞれで得た情報を活かして新たな見方や考え方で制作したことや、両像を同時に設置することで、展示空間を占有する二つの異なる量の効果も期待できることなどについて述べた。さらに４節では、対象を見て表現する際には、対象が異なっても対象の本質を捉える見方は同じだと気付かされたことから、本修了研究作品のタイトルを《環》としたことについて述べた。

次いで第２章１節では、どのようなポーズが量の比較に繋がるかを探り、同時に幾通りもクロッキーを重ね、ポーズ決定後もクロッキーを重ねたことについて述べ、２節では、心棒完成後、荒付けを開始し、ある程度粘土を付けた後は、着衣像は着衣のモデル、裸婦像は裸婦のモデルをそれぞれ見ながら制作を進めたことについて述べた。また３節では、人体の構造を理解するためにクロッキーを繰り返し、それを作品に反映させながら粘土原型の最終仕上げを行ったことについて述べた。そして4、5、6節では、石膏の型取りからFRP樹脂取りまでの過程について述べ、7、8節では作品の展示に対する稿者の考えを述べた。

そして最後に、本制作における成果や反省、支えて下さった方々への御礼、並びに今後の展望について述べた。